

三徳山遺跡発掘調査報告書

資料館建設ならびに農業構造改善事業
に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

昭和62年度

鳥取県東伯郡三朝町教育委員会

序

この報告書は、三徳山三仏寺資料館建設ならびに門前地区・地区再編農業構造改善事業の実施に係る事前調査として、三朝町大字三徳字美徳に所存する三徳山三仏寺境内遺跡と、対岸の山腹に位置する通称・千軒原地内で実施した発掘調査の記録であります。

今回調査しました三徳山遺跡には、かつて存在したと言われる社寺遺構が想定されましたが、調査区内の調査結果では、後に整地されたり、農地の開墾のさいに掘り返されたりしており、明確なものは認められませんでした。

調査員には、国田修二郎氏をお願いしました。氏のご努力と県教育委員会のご指導により、無事現場作業を終え、ここに報告書刊行のはこびとなりました。

この調査に協力いただきました地元土地所有者をはじめ、関係各位に対し、深く謝意を表すものであります。

昭和63年3月

三朝町教育委員会

教育長 倉 本 俊 明

例 言

1. この報告書は、三朝町教育委員会が三徳山三仏寺資料館建設事業と、門前地区・地区再編農業構造改善事業の事前調査のため、昭和62年度三徳山遺跡発掘調査補助事業により実施した発掘調査である。

2. 調査団は次の組織構成である。

団 長 倉 本 俊 明 (三朝町教育委員会教育長)

専任調査員 国 田 修二郎 (三朝町教育委員会委嘱)

調 査 員 山 本 善 政 (三朝町文化財保護調査員)

西 村 光 教 (♪)

大 西 隆 章 (♪)

御 舩 政 明 (♪)

吉 田 芳 之 (♪)

森 本 満喜夫 (♪)

調 査 指 導 鳥 取 県 教 育 委 員 会 文 化 課

鳥 取 県 埋 蔵 文 化 財 セ ン タ ー

事 務 局 前 田 耕 三 (三朝町教育委員会教育総務課長)

知 久 馬 孝 紀 (三朝町教育委員会教育総務課管理係長)

3. 現場での調査は国田調査員が担当した。

4. 遺構、遺物の写真撮影は、国田調査員・知久馬が行った。

5. 報告書の執筆、編集は、国田調査員・知久馬が行った。

目 次

序 文
例 言
目 次

遺跡の環境	1
資料館建設に伴う埋蔵文化財発掘調査	
調査の概要	1
調査の結果	3
農業構造改善事業に伴う埋蔵文化財発掘調査	
調査の概要	4
調査の結果	5

遺跡の環境

三徳山の開山は慶雲3年(706)にさかのぼり、役の行者がこの地を修験道の行場として開いたのがはじまりとされている。

その後、嘉祥2年(849)慈覚大師によって阿弥陀如来・大日如来・釈迦如来の三尊が安置されたので、三徳山三仏寺と称し、堂舎38宇・寺三千軒・寺領1万町歩・3千石を領したといわれる。

昭和9年7月7日、文部省から三徳山全域が「名勝及び史跡」の指定を受けた。

資料館建設に伴う埋蔵文化財発掘調査

調査の概要

☆現収蔵庫(旧御旅所所在地)の西側、資料館建設予定地(字美徳1012番地)に、北東10.9m、幅2m、南北10.9m、幅2mの十字にトレンチを設定し後に、北東側に東西1.8m、南北1.3m四方のグリッドを拡張(北東拡張区、以下同じ)した。(図1、写真1～5)

☆昭和45年に収蔵庫を建設する際の整地土(茶色の層)を除去すると第1層(暗褐色土層)第2層(暗黄褐色土層)の順に、基盤とほとんど関わりなくほぼ水平に堆積している。また第5層(暗赤褐色土層)、第6層(暗黄褐色土層)はほぼ地形に沿って東側に向かって傾斜を持ちつつ堆積しており、特に、第6層は基盤層と色調が最も似ている。いずれの層もしまりがなく、なんらかの遺構も確認できなかった。(図2)

☆第1層からは、北東拡張区を中心に元代の青磁から、近世末から近代と推定される石州瓦まで時期幅のある遺物が出土しており、出土レベルも一定せず混在した状況を示していた。この他、土師質土器、瓦質土器、鉄製品(釘か)、寛永通宝などが出土しているが、寛永通宝以外はどれも小破片でかろうじて器種を推定できるものばかりである。土師質土器(皿か)の断面は磨滅が進んでいる。(写真6)

☆第2層以下は、調査区の東半分、基盤層が落ち込んで谷状地形となっている部分のみ堆積している。

☆第2層からは、北東拡張区を中心に元代の青磁、中世～近代の土師質土器、瓦質土器、鉄製品（釘か）が出土しているが、いずれも小破片であるうえ、出土レベルも一定せず混在状態であった。（写真7）

☆第5層は谷状地形の始まる斜面付近に部分的に堆積している。第2層同様、元代の青磁、中世～近代の土師質土器、瓦質土器、鉄製品が出土したが、いずれも小破片であるうえ出土レベルも一定していない。

☆第6層からは、元代の青磁の小破片、土師質土器（皿形土器）の小破片多数、土師質土器（鉢形土器）の破片、須恵質土器（甕）の破片、鉄製品（釘か）の破片などが出土した。（写真8）

第6層の遺物はほとんど基盤層直上の一定レベルから出土しているが、土師質土器は特に断面の磨滅が進んでいる。

☆東西トレンチの東端の第1層直下（A層）と、東西トレンチの中央付近から東西拡張区にかけての第5層直下（B層）にそれぞれ最大厚約8cmの炭化物層が形成されていた（写真9）。いずれも径3m程度の広がりになると考えられるが、層序からB炭化物層の方が形成時期は古い。炭化層は両方とも良好な木炭が多量に形成されていたこと、B炭化物層直下の第6層の土が一部焼土化していたことから、両炭化物層とも、一時的にある程度の木材を現位置で「焚火」した痕跡と考えられる。炭化物層中から遺物の出土はない。

なお、木炭化した樹種については調査中である。

☆調査区内の基盤層は、大きく西半分の平坦面と東半分の谷状部に分けられる。谷状部の落ちは、ほぼ南北トレンチに沿って始まっている。現在の谷が収蔵庫の直ぐ東側にあることから、谷状部については、そのままなだらかに傾斜しながら谷地形を形成しているものと考えられる。一方、西半分の平坦面は、時期は確定できないが、出土遺物から中世以降少なくとも一回以上の削平行為を受けているものと考えられる。しかし、平坦面の北側には岩脈や径2mを超える岩があるほか、平面図には示していないが平坦面全体に大小の自然の角礫が随所に露出しており、平坦面とはいっても面としての凹凸はかなり激しい。平坦面からの遺物の出土はない。

調査の結果

以上の観察から、次の解釈が妥当と判断する。

☆第6層は、最も初期の段階に基盤層を削平、ないし基盤層が流れ込んで堆積した層と考えられる。時期がある程度限られる遺物を含むことから、第6層形成以前に調査区西半分の現在の基盤層平坦部になんらかの遺構が存在したことも推定されるが、現状では確認できない。

☆第6層が形成された段階で谷状地形が始まる緩斜面で一定量の木材を「焚火」している。

☆第1層、第2層は、基盤層の地形に関わりなくほぼ水平に、しかも一定量の厚さで堆積していること、非常に時期幅のある遺物が混在していることから、この2層は平坦面を谷側へ拡張するための整地層と考えられる。

☆第2層出土遺物の時期の下限と第1層出土遺物の時期の下限に差を設けることも可能なこと、A炭化物層が第2層堆積後、第1層堆積前に形成されていることから整地が時期を異にして2回行われた可能性もある。

☆整地した理由の一つとして、現収蔵庫の位置にかつてあった御旅所の建設が考えられる。先述のとおり、調査区西半分で確認された基盤層平坦面にも削平が加えられた段階で構築物があった可能性を必ずしも否定できないが、現状では礫、岩が多数露出し、凹凸もかなり激しいこと、基盤層まで掘り込まれたような痕跡が認められないことや礎石類が見つからないことから、この地区になんらかの遺構があったものとは考えられない。



写真1
調査区全景
(東側から)



写真2
南北トレンチ
(北側から)



写真3
南北トレンチ
(南側から)

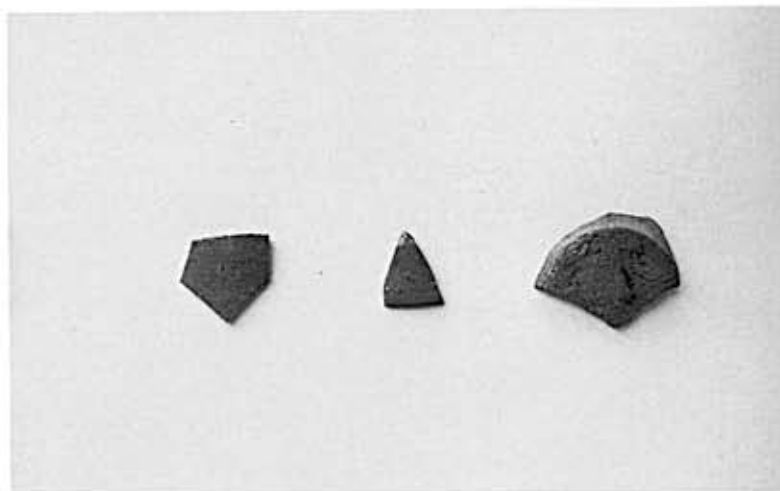
写真4
東西トレンチ
(西側から)



写真5
東西トレンチ
(東側から)



写真6
第1層
出土遺物



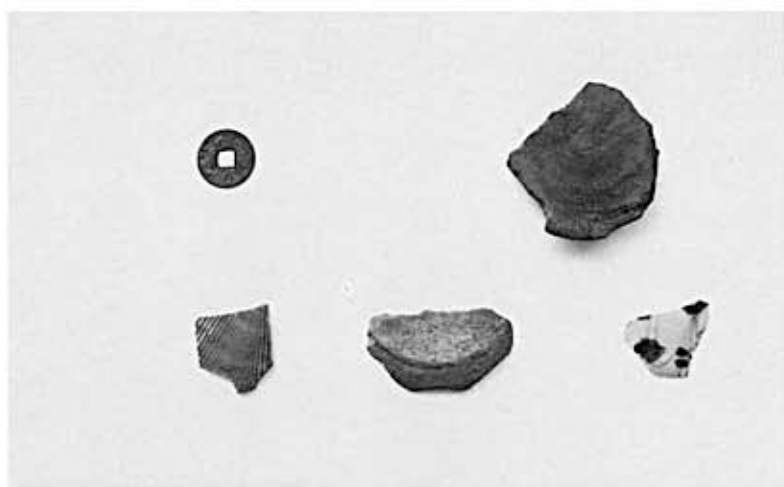


写真7
第2層
出土遺物

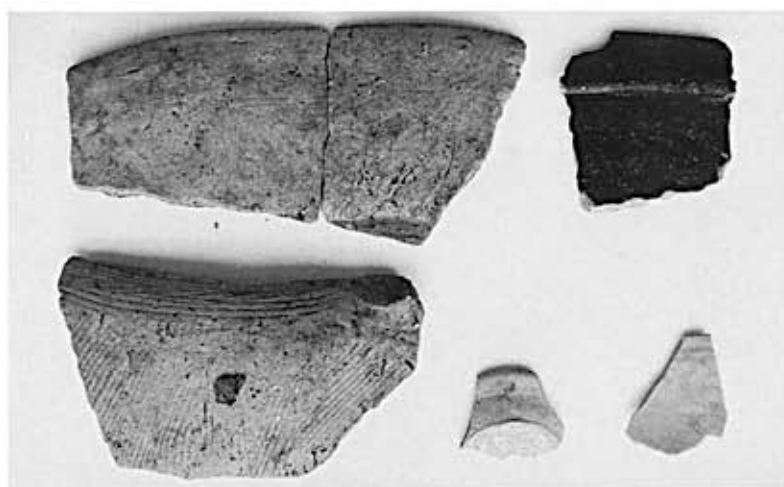


写真8
第6層
出土遺物



写真9
B炭化物層

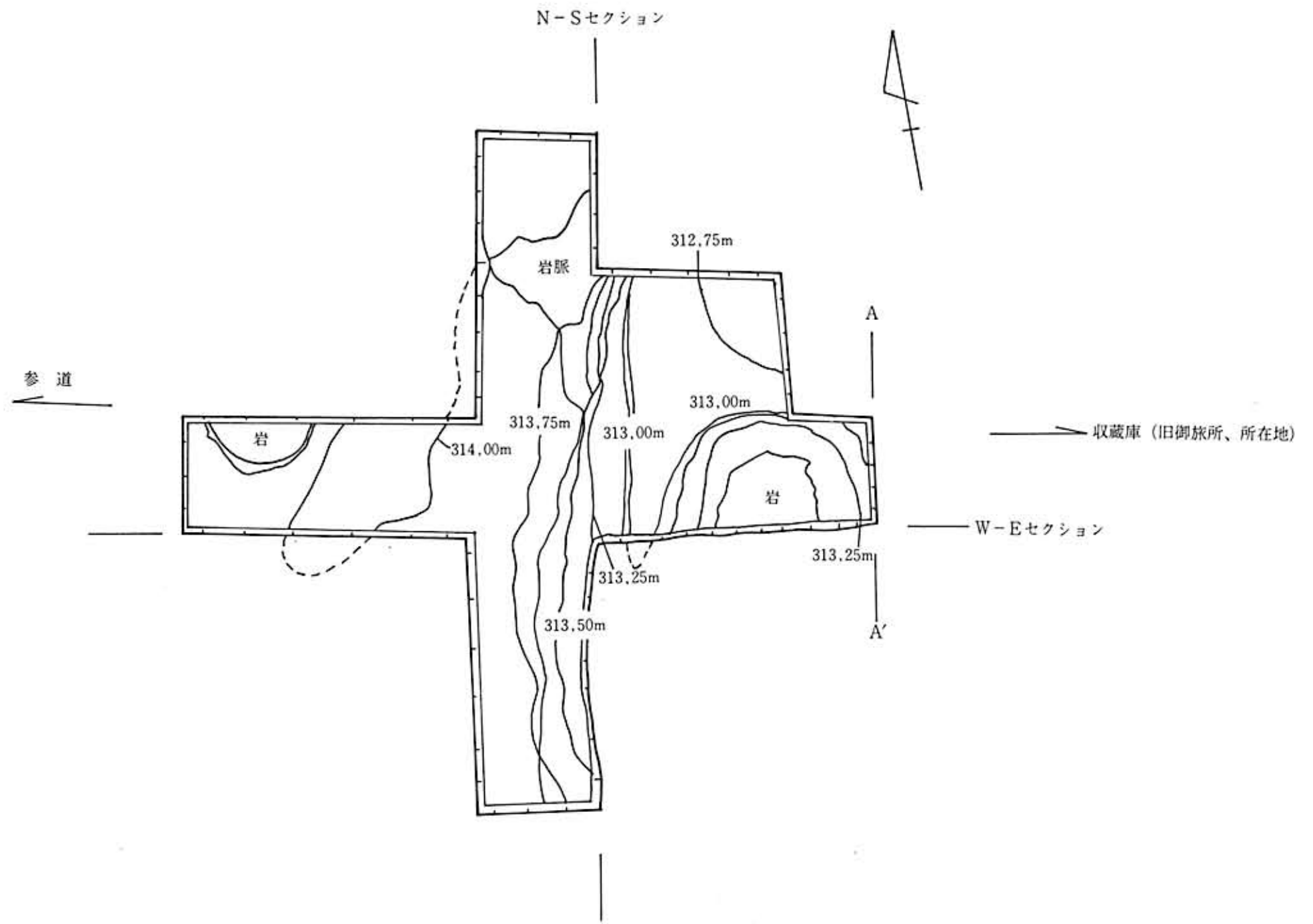
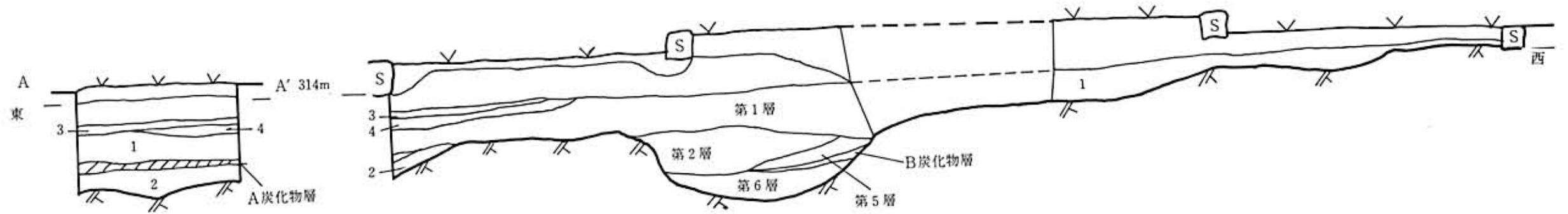


図1 三徳山遺跡 (美徳地区) 平面図 S=1:80

(1) 東西セクション



(2) 南北セクション

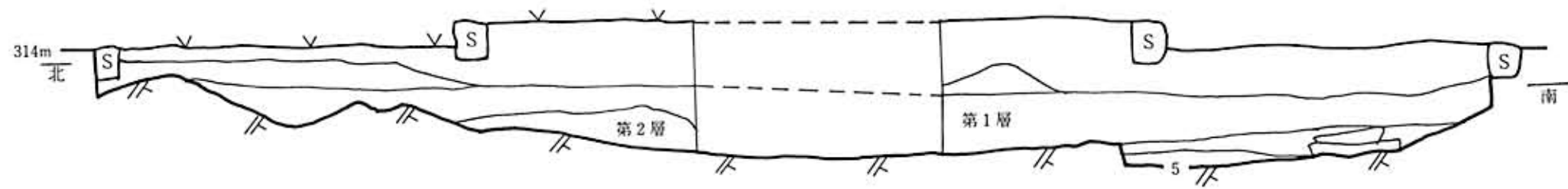


図2 三徳山遺跡 (美徳地区)
セクション (東西、南北)
S=1:40

農業構造改善事業に伴う埋蔵文化財発掘調査

調査の概要

☆合谷地区農業構造改善事業予定地（三朝町大字三徳寺九曜・九曜頭）の水田・畑、元桑畑に、長さ10m、幅2mのトレンチを10本設定し調査した。（図3）

遺構は第1トレンチから土壌が1基検出された。その他のトレンチから遺構・遺物の検出はなかった。

調査トレンチ一覧表

トレンチ番号	遺 構	遺 物	トレンチの規模	備 考
T1	土 壌	な し	10m × 2 m	2.5m × 2 m
T2	な し	な し	10m × 2 m	
T3	な し	な し	10m × 2 m	
T4	な し	な し	10m × 2 m	
T5	な し	な し	10m × 2 m	
T6	な し	な し	10m × 2 m	
T7	な し	な し	10m × 2 m	
T8	な し	な し	10m × 2 m	
T9	な し	な し	10m × 2 m	
T10	な し	な し	10m × 2 m	

土 壌（第1トレンチ）

第1トレンチは九曜地区北西部にあって、谷間につづく水田の中では西端の低い位置にある。土壌はトレンチ内の東寄りに検出された。規模は東西3.5m・南北2.5m・深さ0.3mで歪な形である。底部は平坦であるが、南側の一部がやや深く攪乱されているものと思われる。土壌の西と北の肩の下部分には小さなピットがある。土壌内には多量の炭塊・炭片が混じっており、またトレンチ内表土（耕作土）のすぐ下には少量ながら炭片の混入がみられ、土壌の炭が散乱したものと思われる。土壌より炭以外の遺物の出土はなく、土壌の使用目的、時期は不明である。

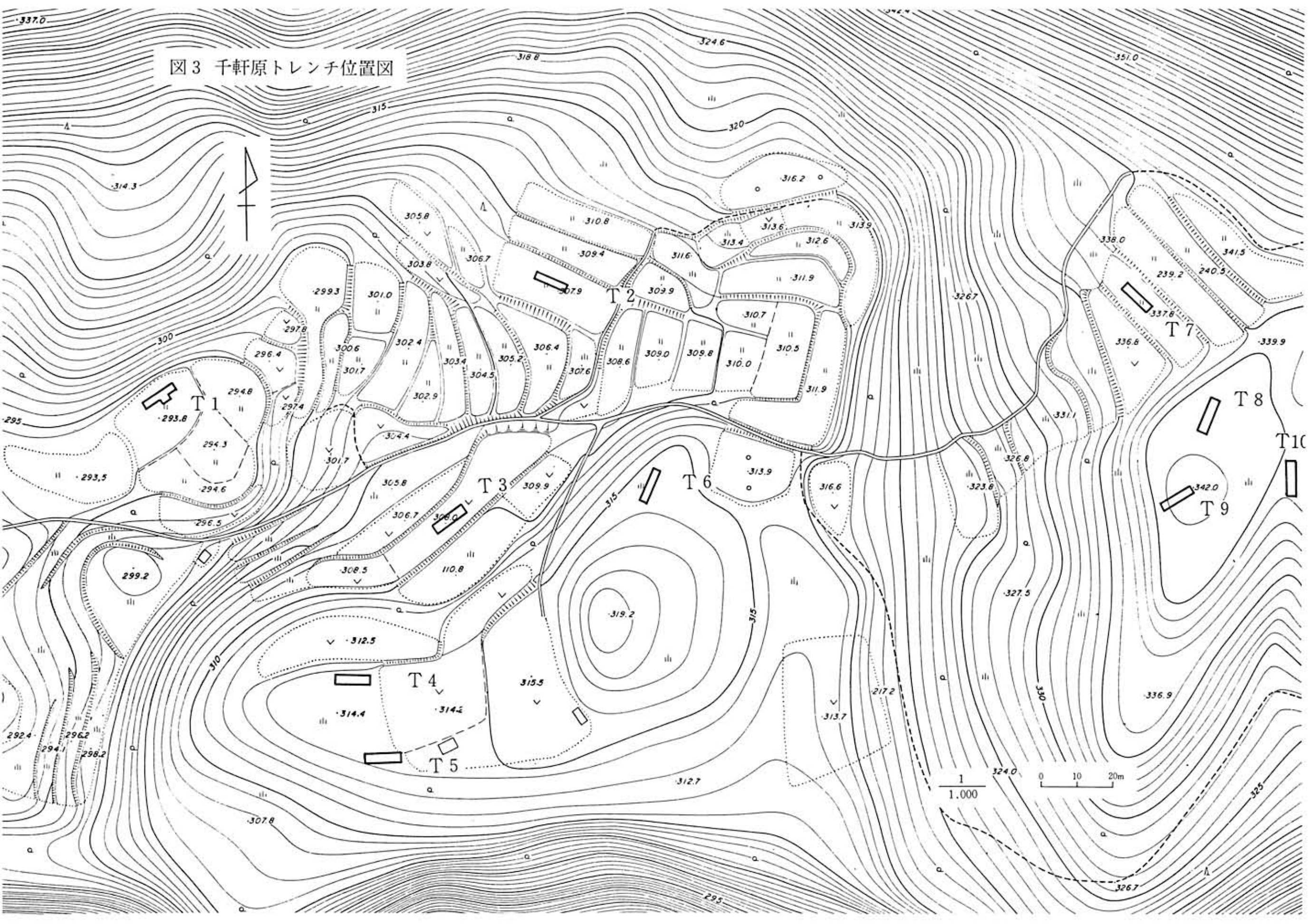
調査の結果

☆今回の発掘調査は、三徳山三仏寺にある誕生仏が九曜地区より出土の言い伝えがあり、また九曜地区が通称・千軒原と呼ばれていることから、三仏寺に関する宿坊等の施設の存在が推定され、調査を実施した。（誕生仏出土の言い伝えははっきりしないが地元の古老のなかには九曜地区ではなく海老谷地区で出土したと言われ、また、この谷では瓦等も出土したと言われている。）

調査は10本のトレンチを入れたが、遺構は第1トレンチの土壌のみであった。土壌より遺物は炭以外検出されず、炭の性格、時期は不明である。その他のトレンチより遺構・遺物の検出はなく、また九曜地区全三仏寺に関する施設等は存在しなかったものと判断した。



図3 千軒原トレンチ位置図





トレンチ1 東より



トレンチ1西より



トレンチ2 南東より



トレンチ3 南西より



トレンチ4 東より



トレンチ6 北東より



トレンチ7 南東より

トレンチ8 南より



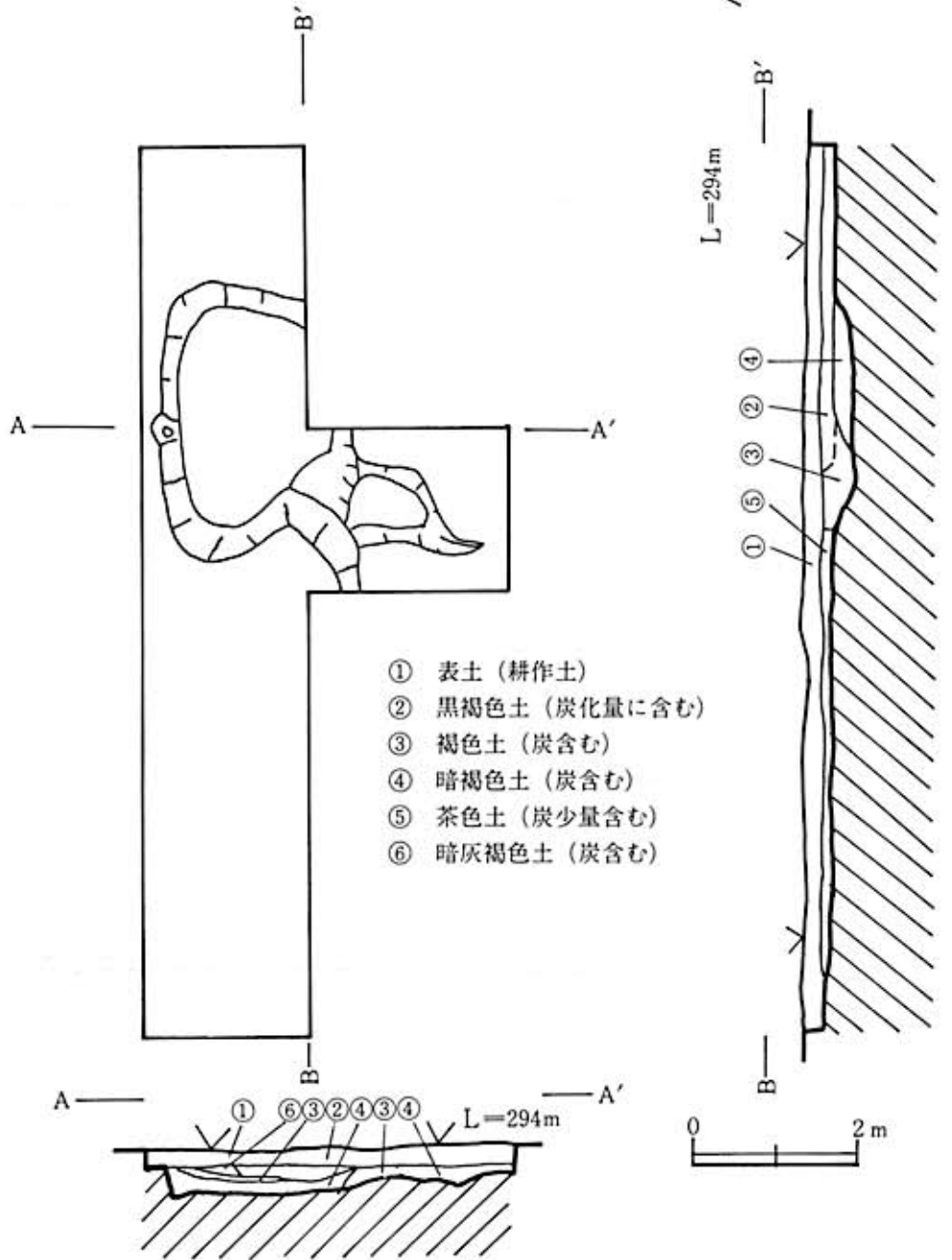
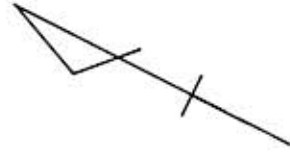
トレンチ9 南西より



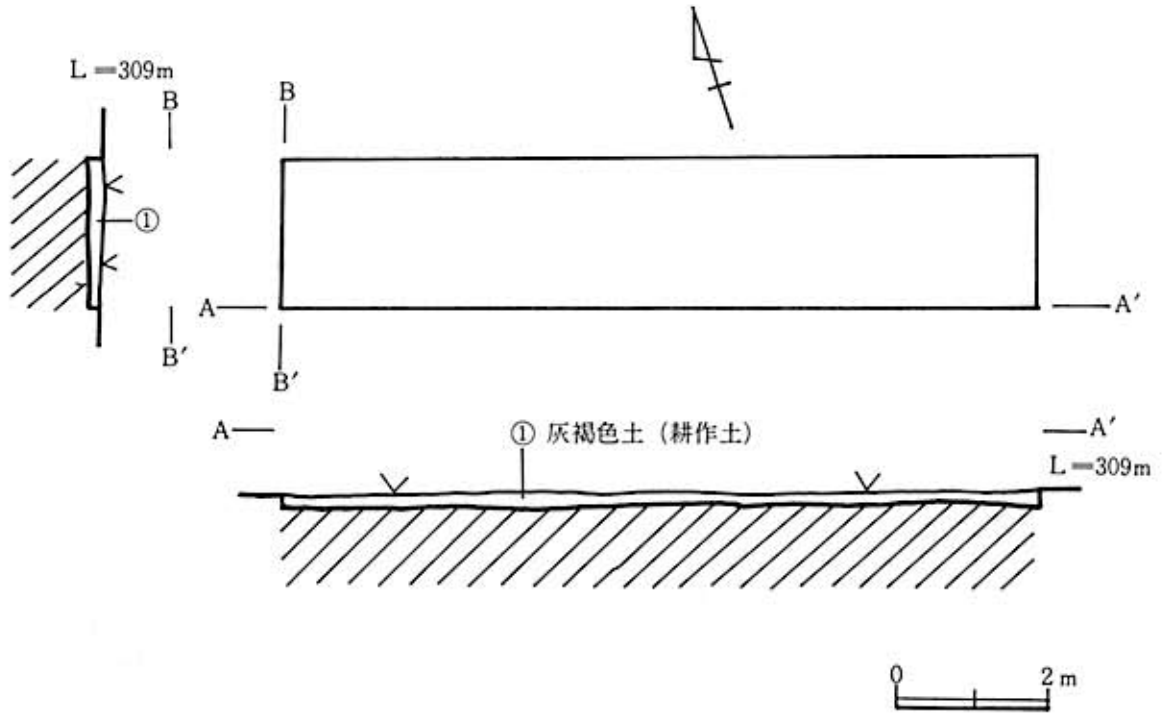
トレンチ10 北より



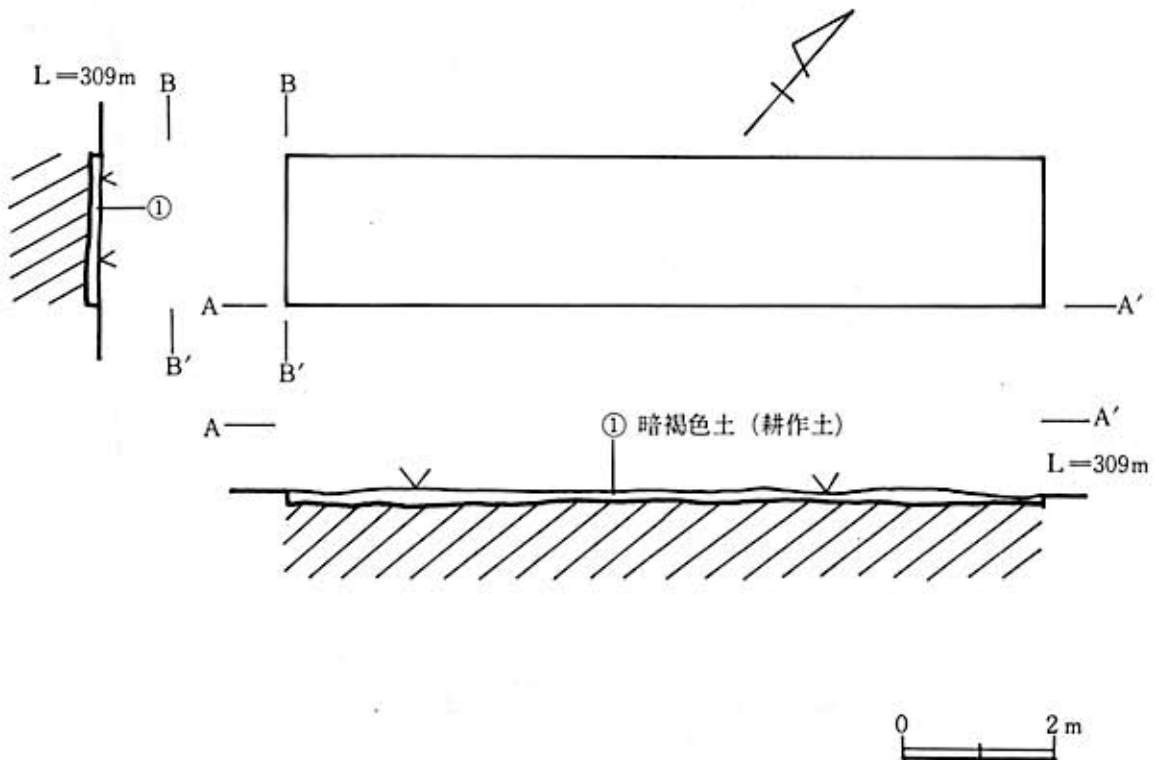
T 1 図



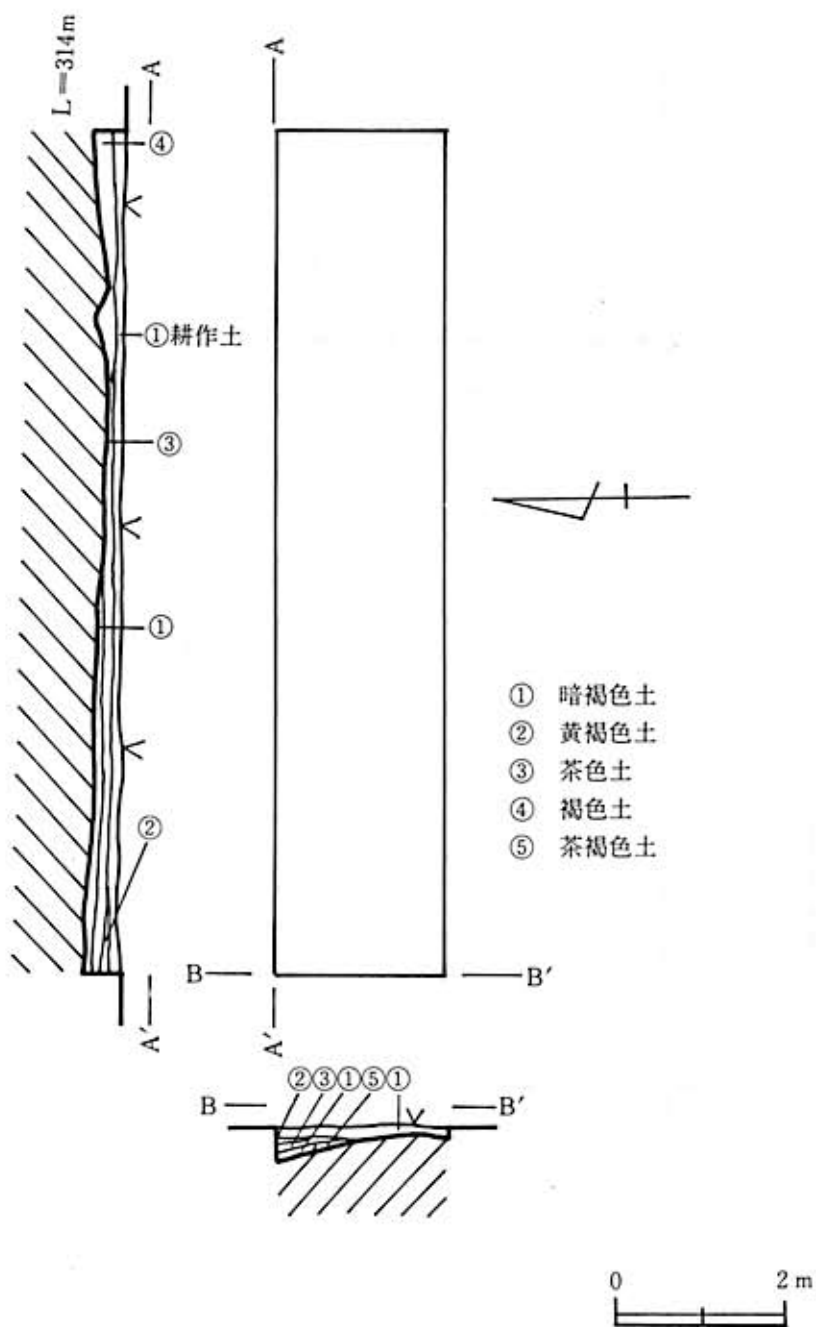
T 2 図 (水田)



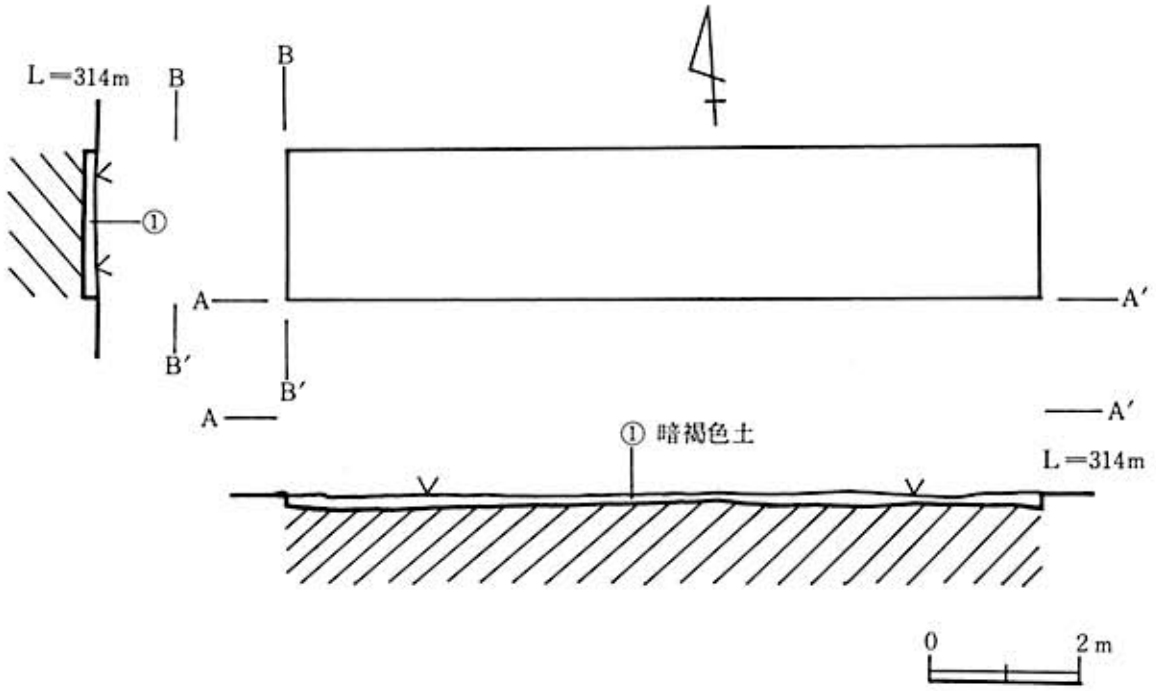
T 3 図 (畑)



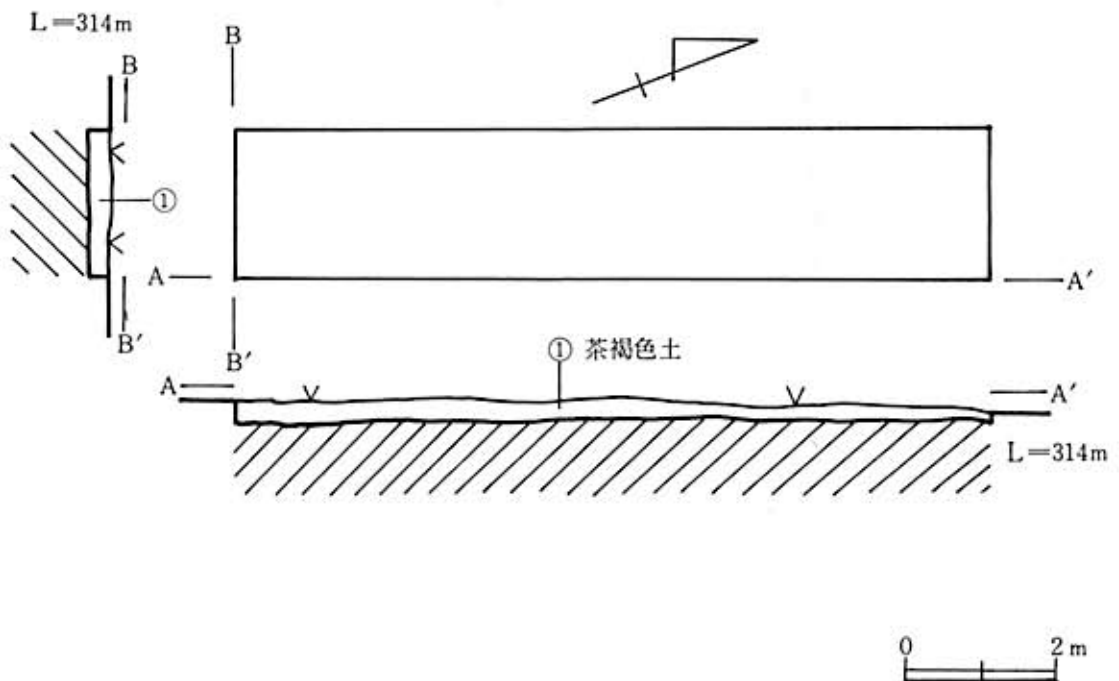
T 4 図 (畑)



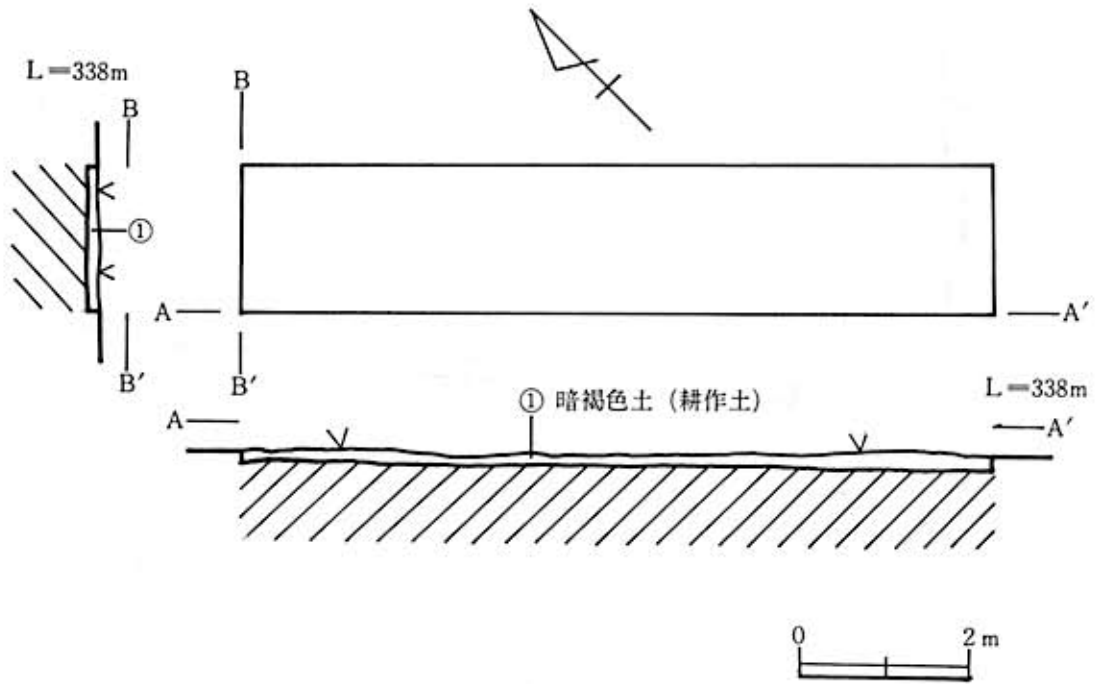
T 5 図 (元畑)



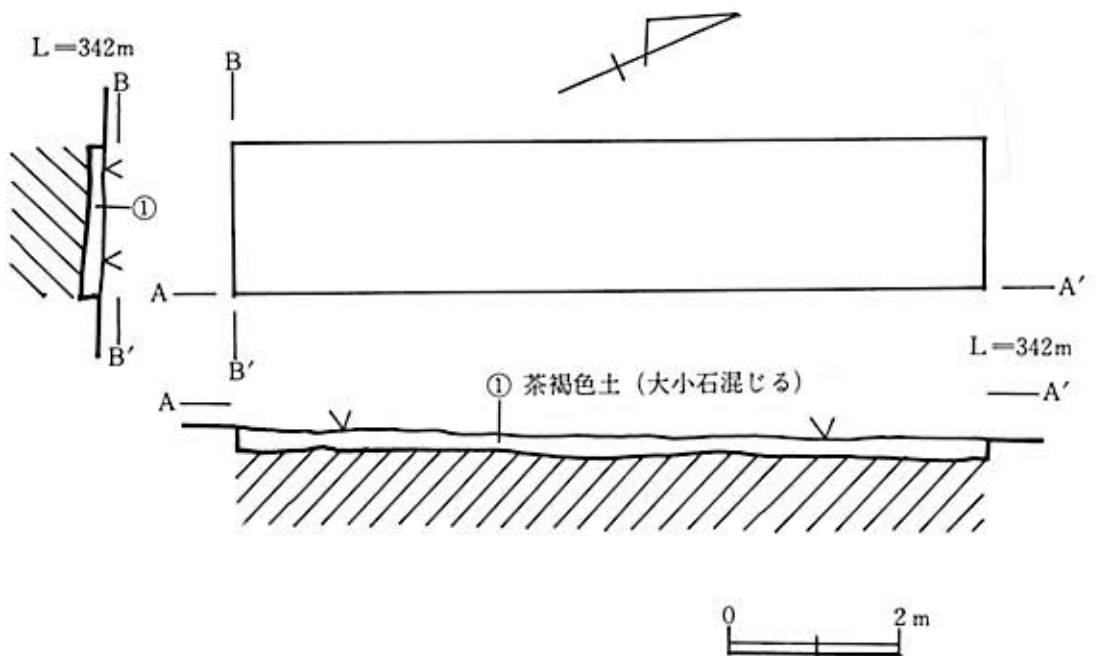
T 6 図 (元桑畑)



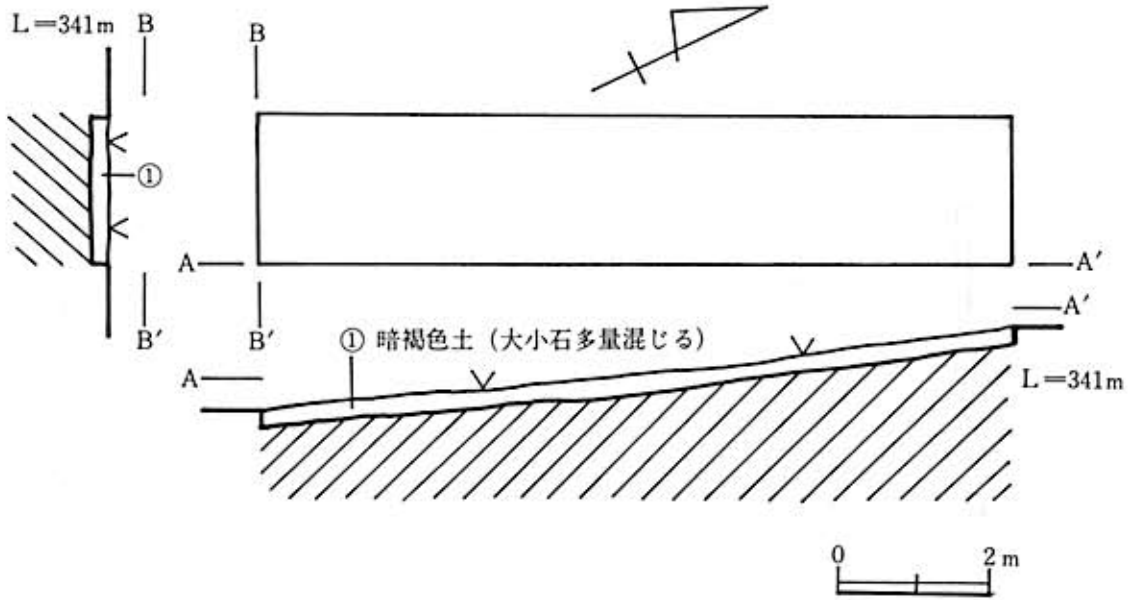
T 7 図 (水田)



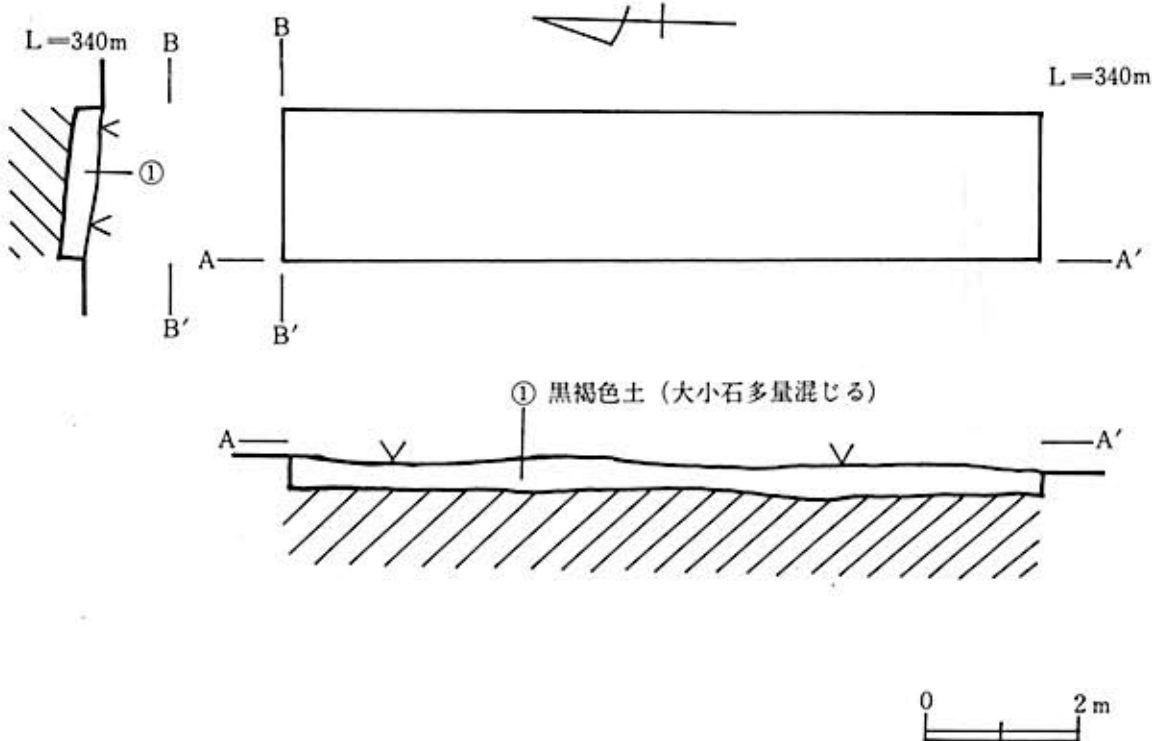
T 8 図 (元桑畑)



T 9 図 (元桑畑)



T 10 図 (元桑畑)



昭和63年 3月15日印刷

昭和63年 3月15日発行

三徳山遺跡発掘調査報告書

編集
発行 三朝町教育委員会

印刷
製本 有限会社 矢積印刷
鳥取県倉吉市宮川町2丁目